優秀賞（京都府教育委員会教育長賞）

北方領土と私たち

京都府立鳥羽高等学校
三年　荒居　祐実

現在、北方領土問題が重要視されている中、竹島や尖閣諸島をめぐる問題もしばしば起こっている。こうした領土問題は、私が日常生活を送る上で支障をきたすかというと、そのようなことはない。だが、こうした問題が外交関係の悪化へと繋がり、自国のプライドを捨てることが出来ずに強まり続けると、それが後に「戦争」「紛争」などを引き起こすことになる。今、こうした問題を私たちは他人事のように見るのではなく、自国で起こっている問題として自分はどう感じているのか、などと身近な問題として理解を深めていくことが必要だと感じる。

そして実際に、こうした問題について目を向けると、沢山の疑問が浮かんだ。とても単純な考えではあるが、「一緒に住むことは出来ないのか」「どちらの領土なのかをはっきりさせる必要はあるのか」などと考えた。

このような考えに至ったのは、北方領土を訪れた日本人に対するロシア人の接し方や歓迎の様子を目にしたからである。料理や踊りなどでもてなし、また気さくに話しかける様子がうかがえた。彼らのそういった様子は、ここに領土問題が起こっているということなど考えさせないようなものであった。本当にここを奪い合うことを続けるべきなのであろうか。このままの関係を保ったままではいけないのだろうか。北方領土に住む人々の人柄を知れば知る程、このような考えを持つようになった。個人として分かり合うことが出来たとしても国同士が理解し合うことが出来ないということが、とても残念である。

そんな中、外国が日本の弱みを利用していることを知った。決して戦争を起こすことのない国、平和主義の日本。この世に、争いを起こさない国であること。このことこそが、弱みとして存在しているのである。だから外国は、攻めても攻め返されることはないだろうという考えのもとで攻め入ってくるのである。

しかし、外国が考えているこの弱みこそが、実は日本の強みになるかもしれない。絶対に武力に頼らず粘り強く交渉する平和外交は、武力以上の力を発揮するかもしれない。そのためにも、今大切なことは、国民全体が一致してこの問題に関心を寄せることである。力に対して力で対抗したのでは、個人として分かり合える日本人と北方領土にいるロシアの人々との間にある関係を台なしにしてしまう。

このような問題を国として抱えている今日、私たち一個人が国の為に出来ることは、どのようなことだろうか。北方領土とは基本的に誰もが自由に行き来が出来る場所ではない。そこにしかないもの、そこでしか感じることが出来ないものがあるのだろう。だからこそ、誰もが北方領土に親しみを感じ、身近なものとして考える必要があると思う。そのために、北方領土に住む人々との交流、行事、文化などを共有していけるような外交関係を築いていくこと。そのことが、これからの日本の課題であり、私たち一個人としての課題である。

私たちは、日本が抱える領土・主権問題をきちんと捉え、そして互いの国を想い、尊敬しあうことを忘れてはいけない。

優秀賞（京都市教育長賞）

あなたは北方領土を知っていますか

京都市立東山泉小中学校
九年　畑中　朱里

あなたは北方領土問題を知っていますか。北方領土とは、北海道の北に位置する四島のことを指します。

日本人が北方領土の存在を知ったのは三百九十年以上も前だと言われています。北方領土周辺は豊かな水産資源に恵まれ、多くの魚介類が捕れます。また、気候は寒暖の差が比較的緩やかなため、植物も育ちやすくて人間が住むのに適した場所です。

そこで、私はそんな北方領土の問題に着目しました。ニュースや新聞でよく見る「北方領土問題」で対立しているのは日本とロシア。

北方領土は日本人がより早くその存在を知り、渡航し生活してきました。一八八五年には条約を結び日本の領土として認められました。しかし、日本の領土である今の北方領土には日本人がいません。それはロシアが日本との条約を破り、自分勝手な行動をして北方領土を占領してしまったからです。しかし、ロシアによる北方領土の占領は国際法的な根拠はなく不法占拠しているものであり、そこは日本領土であって、ロシアの領土ではないのです。このような不当な占領に、北方領土に住んでいた日本人はとても悲しみ苦しんでいます。先祖が、汗水流して開拓してくれた土地なのに、生活すること事もできないし、もう懐かしの風景を見ることだって出来ません。

自分のことと重ねて考えてみてください。急に知らない人たちが銃を手に土足で入ってきて、万年筆や時計などを略奪していったのです。そして、一度逃げれば、その場所にはもう帰れないのです。あなたは耐えることができるでしょうか。

そんな中、前向きに外交交渉は進んでいます。日本とロシアの首脳会談は繰り返され、日本は北方領土を日本の領土だと主張し続け、平和条約を締結するための基本的な条件として譲っていません。しかも、北方領土に現在住んでいるロシア住民に人権、利益及び希望を、北方領土返還後も十分に尊重し続けたいという基本的な方針をもつことを前提として、交渉を続けているのです。

また、この問題に立ち向かおうと様々な運動も行われています。初めは文章だけだったものを、多くの世代に知ってもらうため、パネル展や街頭啓発・署名活動などで、よりわかりやすく歴史と現状を知ってもらおうと、体験談を踏まえながらの運動が行われています。

この状況を知れば、あなたは無関心のままで暮らしていこうと思いますか。誰一人として関係のない人はいないはずです。一人ひとりがこの問題の重みを知り、自分の意見をもち交流し深め合うことで、よりよい考えが出てくるのではないでしょうか。国民が北方領土の現状を正確に知るために、メリットだけでなく、デメリットも含めた情報を得て、正しく認識することで、国民一人ひとりは自分の意見をもって行動できます。これが、今の私たちがやるべきことではないでしょうか。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

大きな一歩

南丹市立園部中学校
一年　松本　佳乃

「自分のこととして考える。」家でも学校でもよく耳にしてきました。ある時、クラスメートの持ち物がなくなりました。先生は「仲間が困っています。自分のこととして考えて、もう一度家でも見てきてください。」と話されました。私はあまり深く受け止めていませんでした。でも次の日、他のクラスメートが「ごめん。間違って持って帰ってた。」と言って返却していました。心の中で何かズキッとするものがありました。

今、北方領土には日本人が一人もいないこと、元島民の方々は七十年間も四島を追い出されたままだということ、このようなことを私は最近まで知りませんでした。現在北方領土に住んでいる人はロシア人ばかりで、日本人が行くことは許されていません。でも、そこは日本の領土です。元島民の方々は、晴れた日には肉眼で見える島を見てどんな思いで過ごしてこられたのでしょうか。「早くロシアの人に出て行ってもらって、元島民の人が帰ることができるようにして欲しい。」ロシアの人は、元島民の故郷を奪った悪い人たちだ。」私は最初こんな風に考えていました。

でも調べていくうちに、北方領土に住むロシアの人々に対するイメージは少しずつ変わってきました。一九九二年から、日本とロシアは「北方四島交流事業」を行っています。これは北方領土問題の解決をめざした、北方四島在住ロシア人との交流です。そこからわかるロシアの人は、私が最初に抱いたものとは違った姿でした。訪問した日本人を歓迎し、日本のことを「好きだ」と言ってくれたり、日本の文化を勉強したりと、私たちと何も変わらない普通の人がそこにはいました。

そして、一番心に残ったのは、北方四島はもうすでにその人たちの故郷になっている、大切な場所になっているということでした。

私は、本当に「自分のこととして考える」ということができていたのかと、自分を問い直さざるを得なくなりました。今、そこに住んでいるロシア人を追い出すと、元島民の方々の思いは晴れても、現住人の新たな悲しみを生むことになります。七十年前に元島民の方々が味わった悲劇が繰り返されることになるからです。元島民の人々や今北方四島に住んでいるロシアの人々、その両方の立場に私は十分に立てていませんでした。そこでもう一度、考えてみました。そして、北方領土は日本に返してもらうけど、現住人を追い出すようなことはせず、その中で日本人とロシア人が一緒に過ごすという解決方法はどうかと思いました。

私は最近のニュースなども見られていないし、まだまだ無関心なところが多いです。しかし、北方領土問題が進んでいないことはわかります。だから、私を含むもっとたくさんの人が「自分のこととして考えるべきだ」と思います。日本とロシアの政治家の方々には、もっと「生の声」を聞いて、その思いに寄り添ってほしいです。そして両方の国民の一人一人が本当に幸せになれる方策を、話し合いで前進させてほしいです。そして次は私たち国民一人一人です。これまでの私がそうだったように、北方領土の問題を知っていても「自分には関係ない」というように、自分のこととして考えられていない人が多くいるかもしれません。そしてそのような無関心が、実際に苦しんでいる人にとって一番悲しいことなのです。

私は、本気でこの問題のことを考え、本当に悲しい思いをしている人たちの気持ちに寄り添い、自分にできることを見つけていきたいです。私にできることはほんのわずかかもしれないけど、それをこの国の一人ひとりがすることで、大きな一歩につながると信じています。そして私は、その一歩を支える人になります。

優秀賞（北方領土問題対策協会理事長賞）

北方領土は日本の領土

京都市立開睛中学校
三年　中山　葉月

北方領土は、私達が住む日本という国で、重要な場所になっています。択捉島は日本の最北端で、そのあたりは三大漁場の一つでもあります。昔から日本人が暮らしてきたこの土地が、なぜロシアの領土だと主張されるのでしょうか。

私は北方領土についてのビデオを授業で見ました。そこで、疑問を抱き、「おかしいな」と思ったところがあります。それは、今までの歴史を見てきて、北方領土のまわりでたくさん条約が結ばれてはいるけれど、北方領土は一度も条約にかけられたことはないし、どこか外国の領土になったことも一度もない日本固有の領土のはずなのに、ロシアが自分の国の領土だと主張しているところです。たしかに、昔ソ連が北方領土を含む地域を占領しましたが、戦争が終わってからは植民地など持たない平和な世界をつくる動きになったはずです。それなのに、今もなお、北方領土がロシアに占領されているのは絶対におかしいと思います。

私は、四つの島すべてを返してもらうべきだと思います。なぜなら、島が返されたら、かつて住んでいた人が戻ってきて、また漁やいろんなことが盛んになり、日本がもっと盛り上がっていくと思うからです。また、島を無理矢理追い出された人からしたら、故郷がなくなったわけですから、一日でもはやく戻りたいと思っている人もいるでしょう。

この問題の解決手段は、話し合いしかないと思います。戦争はもう二度と起こしたくありません。今もなお、話し合いが行われているニュースをたくさん目にします。私ができることは、ただただ話し合いが上手くいって、双方が納得のいく結論が出ることを願うだけです。

私は政治家ではないので、直接ロシアの人達と話し合うことはできませんが、一つだけ心に決めたことがあります。それは、いくつになっても、「北方領土は日本のものだ！」といつでも自信を持つことです。この問題は、まず国民が自分達の領土だと思わないと始まらないと思います。だから、私はこれを一生貫きます。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

国境を越える笑顔

宮津市立宮津中学校
一年　竹本　雪輝

なぜ、人間同士で奪い合うのでしょうか。第二次世界大戦直後の八月十八日。ソ連が国後島に攻めてきたこの遠い日。多くの日本人が犠牲となり、豊かな生活も次々となくなっていったに違いない。さらに、それと同時に再び戦争が起こるのではないかという不安が募り、人々の安らかな心までも奪われたに違いない。

最初、私は領土問題に対する深い興味はなく、他人事のようだった。しかし、中学校で北方領土のついて学んだことをきっかけに、私の中の北方領土に向かう興味がどんどん大きくなってきた。そして、ソ連の兵士たちが島をめちゃくちゃにした風景が私の目に焼き付いた。他人事のように思っていた自分自身に罪悪感を感じ、胸が痛くなった。

そんな中、私の心を大きく動かす動画があった。その画面には、日本人とロシア人の少年が一緒に笑っている姿があった。しゃべる言葉も人種の違いもないような笑顔だった。それは「ビザなし交流」というものだった。一九九二年に始まり、日本人とロシア人との交流を深めるためにできたものだ。言葉の違い、文化の違いを理解しあうことは、とても大切なことだと私は思う。第二次世界大戦、一生忘れられないであろうあの悲惨な日々の壁が少しずつ、少しずつ埋まっていくように見えた。この「ビザなし交流」は、これからも国境を越えた笑顔を作り続けてくれるだろう。

でも、私が学んだことは良いことばかりではない。課題が出てきた。それはこの四つの島、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の元島民の意見だった。

「いつかきっと、本当の意味で日本の島に戻したい。」ということだ。確かにこれまで日本とロシアは共通の認識を持とうとしたり、東京宣言の交渉などが行われてきた。しかし、いまだ日本のもとへ、あの四つの島々は返ってきてはいない。それはこれからの日本とロシアの努力にかかっている。私はそう思う。

私はこの学習で北方領土問題を深く知ることができた。でも、それだけではない。国境を越えて笑顔がつながることの喜びを、私は学ぶことができたのである。今回学んだことを私の人生の糧としたい。

本当の意味で四つの島を日本に返してもらうのは、難しいことかもしれないが、夢ではない。そのためには、両国の信頼と努力が必要である。

私は少しでも早く、元島民の方々の願いがかなってほしいと思う。そしていつかきっと北方領土がこの国、日本へ戻ってくるという信念を、私はいつまでも強く持ち続ける。

優秀賞（北方領土返還要求京都府民会議会長賞）

二国が協力するために

京都市立洛水中学校
三年　門田　海

北方領土は、第二次世界大戦後の一九五一年に結ばれた「サンフランシスコ平和条約」において、条約の署名にロシアが拒否したために、現在までロシアに不法占拠されてきた。

僕がこの事実を知ったのは、つい先日の社会の授業だ。それまで僕は日本の固有の領土である「北方領土」について、どのような歴史をふまえ今日に至ったのか、事実に対してあまりに無知だったのではないかと思う。だが、授業で配られたプリントや北方領土の映像に実際に目を通して、不法に占拠された領土なのだから、日本は返還を堂々と主張しなければならないと思った。

一九五六年に結ばれた「日ソ共同宣言」以来、ロシアとの外交交渉が始まった。僕は北方領土が日本の領土だという事実は変わらない真実であり、この領土問題の解決において、この事実をロシアに主張していかなければならない。だが、領土問題の解決は、双方の国の和解から始まると僕は思う。今後、日本とロシアが互いに協力関係を持ち、外交交渉を行うべきだと考えている。

僕は社会の授業でみた択捉島での「ビザなし交流」が印象的だった。実際に現地の住民とともに過ごす中で、理解できることは豊富にある。また、国内でも「北方領土の日」という日が、二月七日に定められている。毎年、この日には東京で、北方領土返還要求全国大会が開催され、全国各地においても大会やパネル展示、キャラバン活動などが行われている。ビザなし交流を含め、このような活動は国民が北方領土について正しく理解する機会であり、現地の人々に日本人の考えを主張できる交流の場でもあると僕は思う。一人一人が北方領土に対して、強い意志を持つことが、この問題の解決につながるのだ。

僕たちは、終戦後、北方領土から家、故郷を突然奪われた約一万七千人の島民がいたという事実を、北方領土が日本の固有の領土である事実を忘れてならない。同時に、双方の理解を目的とする返還の主張に対し、はっきりとした意志を示さなければならない。平和条約の一日でも早い締結を目指し、友好的に且つ、慎重に主張を続けることが問題の解決への道である。北方領土が「ロシアとの良好な関係への架け橋」となることを僕は信じる。

優秀賞（京都新聞賞）

戦後七十年の重さ

亀岡市立東輝中学校
二年　西ヶ開　麻衣

「北方領土問題」

中学生以上なら、誰もが聞いたことがあるだろう。しかし、誰もが知っているのに、今この問題がどういう状況にあるのか、きちんと説明できる人は少ない。私自身もロシアとの領土問題であること、それが北海道の先の四島だということ、長い間解決されていないということぐらいしか知らなかった。私は、この作文を書くことを機に、北方領土について調べてみた。

なんとこの問題、戦後七十年たった現在でも、結論どころか話し合いもまとまっていないのである。四島返還にこだわる日本と、それに応じないロシアとでお互い譲らず、ずるずると問題が長引いてしまっているらしい。細かな原因は他にもいろいろあるようだが、七十年経ってもあまり進展していないのは遅すぎるのではないかと思う。

この問題について気になった点がある。それは北方領土に住んでいた元島民の方たちのことについてだ。北方領土は戦前は日本人が住んでいた。しかし、ソ連に占領されてからは、元島民は追い出されてしまったままだ。戦後七十年もたち、元島民には亡くなってしまい、故郷に帰ることができなかった人がたくさんいるのだ。元島民とその子孫たちは、七十年経った今でも故郷に帰ることを待ち望んでいる。もし将来、北方領土が返還されても、当時住んでいた人たちはほとんどいなくて、島も長い年月を経て完全にロシア色に染まってしまっている。問題の解決に時間をかけすぎたことが残念でならない。

七十年という期間の犠牲は、元島民だけでなく今現在北方領土に住むロシア人たちにも降りかかるのではないかと私は考える。北方領土が日本に返還されれば、そこに住むロシア人たちは土地を離れなくてはならない。七十年あれば世代交代もし、北方領土生まれの子どもたちも多くいることだろう。解決に時間をかけすぎたせいで、北方領土を、故郷を離れなくてはならない人が、今度はロシアに出てきてしまう。問題の終結が遅いほど、故郷を失う人が多くなってしまうのだ。

現在、北方領土問題解決のため日露間で何度も話し合いが行われている。国後、色丹の二島返還案、これに歯舞群島を追加した三島返還案、日露の面積が等分になるように三島と択捉島の一部を日本のものとする三・五島返還案、四島返還案など、様々な意見がある。日本とロシア、お互いが納得できるよう話し合いを重ねるのはもちろん大切だ。しかし、その間にも多くの人が故郷へ帰るのを待ち続けていること、解決が遅いほど故郷を失う人が増えることを忘れてはならない。

もう七十年も経ってしまった。過ぎてしまった時間は取り戻せない。私は、一刻もはやく北方領土問題を解決させ、悲しむ人を少しでも減らすことを強く望む。

優秀賞（京都新聞賞）

北方領土について

京都市立烏丸中学校
一年　谷井　亜斗夢

終戦記念日を迎え、今年も平和について考えると、国とは何なんだろうかと思う。国のためでなければ一人では人を傷つける戦争はしないだろうと。また、北方領土の問題では国境とはなんだろうと思う。どうして住んでいる人々が法的根拠もなく退去させられるのか。

近年、中国や韓国など近隣諸国との国境争いがある。さらにロシアによる侵攻など平和を脅かす国家間の争いのニュースが数多くみられる。一方、「爆買い」等の言葉ができるなど、中国人観光客を歓迎する人々の友好的なニュースがテレビなどで報じられている。また、中国のほか韓国やロシアはスポーツでの対戦などで交流があり、地理的だけでなく身近な国である。

しかし、第二次世界大戦の終戦当時、ソ連により占領された北方領土はまだ返還されていない。終戦当時、北方領土である歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島では、一万七千人もの日本人が暮らしていたが、すべて強制退去させられ、現在も日本人は一人も住んでいない。当時住んでいた日本人一人ひとりの意思に反して、強制的に退去させられるということとはどういうことなのか。住んでいるのに退去させられ、その土地が外国の支配地となったら、どんなに悲しいことだったのかは想像できる。国がその土地に住んでいる人の意思に反して強制的にその土地を奪っていいのだろうか。その土地に住んでいる人より他の国の方に権利があるというのか、法的根拠もないのに。

ロシアだけでなく、中国や韓国とも観光やスポーツで交流し、それぞれ友好を深めている。しかし、国家間では、生命を脅かすような争いが起きる。過去に戦争などの悲しい歴史があっても、その歴史を繰り返さないのが現代人の知恵である。ただ、この問題は戦後七十年が経過し、現在ではロシア人だけが居住しており、解決は困難に思われる。北方領土には豊かな自然や資源があり、ロシアも譲れないだろうが、日本も譲れない。

ただ、一九九一年にソ連側から提案され、一九九二年から始まったパスポートやビザなしの北方四島交流事業により、日本人と北方領土在住のロシア人との相互理解が進んできている。ロシアは隣国でありながら、北方領土問題のために平和条約が結ばれていない。相互の理解を深め、平和条約を結ぶことも期待したい。住民の意思に反した国が、今度は予想に反して、なかなか進展してこなかった北方領土問題を解決してくれないだろうか。現在となっては、平和的にその土地に関わる人々の意思に合致した解決となってほしい。少しでもこの問題の解決が進展していくように、私たちは北方領土問題についての歴史をはじめ、この問題に関する様々なことを正しく理解していきたい。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土を返還してもらうために

宮津市立養老中学校
三年　藤原　裕希

「北方領土問題」この言葉は、今まで聞いたことはありましたが、詳しいことまでは分かりませんでした。この学習をするまでは、「日本の領土なのに、ロシアが勝手に占領している。ロシアは自分勝手な国だ。」と思っていました。しかし、この学習をして、北方領土問題やロシアという国への考え方が大きく変わりました。

現在、北方領土はロシアに占領されています。ここで一つの疑問が浮かびます。なぜ、日本固有の領土がロシアに支配されているのでしょうか。時代は七十年前にさかのぼります。一九四五年、八月九日、ソビエト連邦が日ソ中立条約を破り、当時日本人が住んでいた北方領土に攻めてきたのです。日本人は、一人残らず追い出されてしまいました。そして、北方領土はロシアに不法占拠されてしまいました。簡単に例をあげると「自分の家に見知らぬ人が入ってきて、そのまま居座っている。」ということです。

皆さんの中には、「なぜロシアは日本に北方領土を返してくれないのか。」と思っている人も、少なくないと思います。実際私もそう思っていました。しかし、それは大変難しいということが分かりました。なぜなら、その北方領土には今ロシア人が住んでいるからです。先ほどと同じように例であらわすと、「見知らぬ人がそこに家具などを置き、何年もそこに住んで、住み慣れた家になっている。」ということです。だから、急に「ここは元々は別の人の家だから、すぐに立ち退きなさい。」とか、「すぐ出て行け。」とはなかなか言えないのです。

そういう問題もあり、ロシアへの交渉が難航しています。これらのことから、「日本人はロシア人と仲が悪い。」と思う人も多いと思います。しかし、全員が仲が悪いということではありません。私が見た、あるニュースでは、日本人とロシア人が仲良く交流していました。しかし、北方領土問題が原因でなかなかそのロシア人に会えないと言っていました。日本人は「早くその問題を解決してほしい。そうなったら、私の友人に会えるのに。」と言っていました。私はそういう人達のためにも北方領土問題を早く解決しなければならないと思います。

この学習をして、今まであまり深く関わったことのなかった問題について考えることができました。私は「ここは私たちの領土だからすぐ出て行け。」など言うのではなく、もっともっとロシアとの交流事業を増やせばいいと思います。総理大臣も大統領も人間です。人間を繋げるものは、ただ話し合うことだけではなく、触れ合うことだと思います。それが北方領土問題を解決する第一歩だと思います。

優秀賞（ＫＢＳ京都賞）

北方領土について考える

京都市立嵯峨中学校
二年　濵田　和成

皆さんは、北方領土についてどれだけ知っていますか。「私にはあまり関係がないから。」と思っていませんか。そんなことはありません。これは日本国民全員の問題なのです。

では、なぜ日本とロシアは北方領土でもめているのでしょう。そもそもロシア（旧ソ連）の不法占拠から始まったことで、元々日本の領土であり、初めから日本人が住んでいました。しかし、ソ連は当時、北方四島に住んでいた日本人を強制退去させました。この行為はとても矛盾していませんか。先人たちが築いてきた北方領土をあっさりと奪われてしまう。僕たち日本人は完全な被害者なのです。

日本は今までにたくさんの外交交渉を積み重ねてきましたが、「平和条約を締結するよう全力を尽くす。」や「早期解決のために交渉を加速させる。」など、どれもあいまいな答えばかりです。このままでは、本当の真実が塗り替えられてしまいます。今年は北方領土問題が発生して七十年という節目でもあります。一刻も早く北方領土を返してもらいたいと思います。

その願いを叶えるべく、たくさんの人々が様々な活動を行っています。署名活動や北方領土展、僕たちが行っている作文コンクールもその一つです。僕たちの願いはただ一つ。あの自然豊かな四島を早く返してほしい。そして、その願いは政府にも届いたのです。毎年二月七日を「北方領土の日」と制定されました。そして、北海道から全国に広がった返還運動を更に深めていき、全国的な盛り上がりを図るために作られたのだと思います。

たくさんの自然に恵まれている北方領土。それはまさに日本の誇りです。我が国日本の大切な財産です。だからこそ、このままで良いはずがありません。そう、これは最初にも述べた通り、日本国民全員が考えなければいけない問題なのです。ですから、今、日本とロシアとの間では何が起こっているのか、どこまで解決に近づいているのかなど、自分から調べたり、考えたりするなど、積極的に北方領土問題について「知ること」が大切だと思います。そして、次の世代の子どもたちに「伝えていくこと」がとても大切だと僕は考えます。この「知ること」と「伝えていくこと」を忘れずに生活していくことで、着実に北方領土返還に近づくと思います。僕はそう信じています。一刻も早く日本に北方領土が返還されますように。